

医療の届かないところに医療を届ける

# JAPAN HEART NEWS



夏  
2021

01: [特集]ミャンマー デモの混乱と不安を乗り越えて

02:カンボジア こどもたちと未来の命のために

03:小児がん患者来日治療

04:SmileSmilePROJECT 05:ラオス

06:新型コロナウイルス感染症緊急支援



## 01 ミャンマー

### デモの混乱と不安を乗り越えて

ミャンマーは、ジャパンハートの始まりの地。1995年に、創設者の吉岡秀人がミャンマーで開始した医療活動が、今のジャパンハートの事業につながっています。

当時のミャンマーは、軍事政権の真ただ中でした。そもそも、「ミャンマー」という国名は、1988年のクーデターで政権を掌握した国軍が、翌1989年につけたものです。それ以前には、この国はビルマと呼ばれていました。国軍の独裁政権であることや、国内の少数民族との内戦が続いていたことから、当時のミャンマーは国際社会から人権侵害をたびたび指摘されており、経済制裁も受けていました。その結果、国内では医療が届かない人が数多く生まれたのです。

吉岡秀人が最初に医療支援を始めてから25年以上が経ちました。この間、2011年に民政移管が実現し、2015年の総選挙では、アウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟が最大議席を獲得しました。民主化に向かって着実な歩みを見せる中、2020年の総選挙でも国民民主同盟が圧勝したのに対し、国軍は不正選挙を訴えてクーデターを起こしたのです。

ミャンマーの人たちにとって、長年の独裁を経てようやく得られた自由な社会は、絶対に手放すことはできません。アウンサンスーチー氏をはじめとする政権与党幹部らの軟禁は、かつての軍政時代にも行われていたことで、あの時代に戻りたくはないという強い思いが、人々を抗議活動に駆り立てるのです。

現在ミャンマーでは、新型コロナウイルス感染症の脅威に加えて、各国大使館が自国の在住者に退避勧告を出しており、国際社会の中で孤立化が進んでいます。また、公務員を中心とした労働者らが、抗議活動の一環で職務放棄を行なっているため、公立病院が患者を受け入れられなくなり、人々に医療の手が届かなくなっています。

ジャパンハートは、この状況で一人でも多くの人を救うために、できる限りの力を尽くしています。



雨の中、ATMに並ぶ人々。日常生活は大きく変わってしまった。

#### ミャンマーの歴史とジャパンハート

- 1948年  
ビルマ連邦としてイギリスから独立
- 1962年  
クーデターにより軍事政権樹立
- 1988年  
学生を中心とした民主化要求運動が発生
- 1989年  
軍事政権がアウンサンスーチー氏を自宅軟禁  
国名をミャンマー連邦に変更
- 1995年  
吉岡秀人、ミャンマーで医療活動を開始
- 2007年  
僧侶を中心とした反政府デモが勃発
- 2010年  
アウンサンスーチー氏の自宅軟禁解除  
ジャパンハート、養育施設Dream Train開設
- 2015年  
民政復帰後初の総選挙実施  
アウンサンスーチー氏率いる  
国民民主連盟(NLD)が圧勝
- 2020年11月  
総選挙で再度NLDが圧勝
- 2021年2月  
クーデター発生、国軍による政権奪取  
ウィンミン大統領、  
アウンサンスーチー氏が身柄を拘束される

## 一変した社会、変わらぬ信念



2021年2月1日。この日のクーデターを境に、ミャンマーは一変しました。ショッピングモールや目抜き通りで連日繰り広げられるデモ、「Z世代」と呼ばれる若者たちによるオンラインでの抗議運動、各所に設置されたバリケード、公務員の職務放棄運動、銀行の稼働停止など、軍事クーデターに反意を示すさまざまな活動が全国で一斉に展開されました。

それらに対する取り締まりも、日を迫うごとに苛烈になっていきます。当初は放水やゴム弾の使用にとどまっていたデモ隊への鎮圧も、2月の半ばからは実弾が使われるようになり、各地で死亡者が発生し始めます。時には重火器も使用され、犠牲者の数は日に日に増加し、4月末現在で750人を超えました。

インターネットの遮断や、夜間外出禁止令・戒厳令の発出なども加わり、ミャンマーは、これまでとはまったく違う世界となってしまいました。4月以降は、取り締まりの手法も変わりました。大規模なデモが鳴りを潜め、それに対する大弾圧がなくなる一方、軍が「指名手配」としている抗議活動の首謀者や指導的立場の人々、芸能人、ジャーナリストらの自宅に夜間押し入って逮捕するという事態が発生しています。その対象には外国人も含まれており、現在、1名の日本人ジャーナリストが拘束されています。最大都市ヤンゴンでは、市内で軍用車両を見かけることが増え、各所で検問が実施されています。以前より犠牲者の数自体は減ったものの、言い知れぬ緊張感が漂っています。

## こんな時だからこそ、医療活動を

社会情勢は、医療事情にも暗い影を落としています。特に、公務員の職務放棄運動に国立病院の医療者らが加わったことで、診療や手術などの医療活動が滞りました。

公的医療保険制度のないミャンマーでは、私立病院に通おうとすれば、医療費は全額自己負担。その額は、国立病院と比較すると非常に高額です。国立病院が頼みの綱となっている患者たちは、治療を諦めざるを得ない状況に置かれています。

一体どれほどの患者たちが、治療を受けることができずに命を落とし、あるいは苦しんでいるのか。正確な統計はありませんが、決して少なくはないはずです。

「こんな時だからこそ、真摯に懸命に医療活動をやろう」

クーデター発生後に行われたミーティングの中で、吉岡秀人は医療チームにそう伝えました。

医療者が続々と職務放棄運動に参加する中、スタッフの思いは複雑でした。しかし、吉岡が掲げた「医療の届かないところへ医療を届ける」というジャパンハートのミッションを改めて胸に刻み、2月以降も変わらずに外来診療と手術を続けています。

4月には車で片道5時間を走り抜き、少数民族が多く住む僻地の病院で200件以上の外来診療と、50件以上の手術を行いました。世の中がどう揺れ動こうと、「すべての人が生まれてきてよかったと思える世界をつくる」ため、これからも「医療の届かないところに医療を届ける」べく、私たちは歩みを止めません。



# Dream Train

## 可能性の芽を伸ばす「マナビ」を続けよう！

ヤンゴンで生活をしていると、刻々と変わりゆく情勢と、必死に暮らしを守ろうとする人々の落差をあちらこちらで感じます。Dream Trainのある地域には戒厳令が出されたため、私たちも子どもたちが不測の事態に巻き込まれないよう、外出の規制や夜間22時の消灯を徹底しています。子どもたちは、ようやくこの生活に慣れてきたようです。

一方で、公立学校は、新型コロナウイルスの脅威に昨今の情勢が加わり一年以上閉鎖されたまま。抗い得ない生活の変化に未だ戸惑うことは、今も少なくありません。しかし、厳しい状況下だからこそ変えられないものがあります。それは、「マナビ」の継続です。私たちは、先が見えないときこそ進むべき道のりを浮かび上がらせてくれる目標が必要であり、そこにフォーカスをするための環境整備こそ、養育施設の役割であると考えています。



Dream Trainは、100人以上の子どもたちが暮らす個性の集合体です。目指すは「全ての才能の開花」ですが、そのためには、まず施設内で才能の目を伸ばす機会を作ることが大切です。現在では、外部講師やボランティアスタッフ、ご支援くださる方々のご協力により、さまざまな教育プログラムが実施できるようになりました。

今年開始した取り組みには、高校生の希望により実現した「PC講座」や、時代の潮流から未来を考える「キャリア教育」、タブレット端末を使用した「知育」があります。さらに、これまでの教育にプラスアルファを加える試みとして「オリジナル日本語検定試験」を行いました。年々学習者の低年齢化が進み、最年少では11歳でクラスに参加する子もいるため、モチベーションを保ち続けられるよう、専任スタッフだけでなく、施設卒業生や元スタッフなど、多くの仲間の力を借りて改善を繰り返しています。

行動が制限されていても、子どもたちが夢中になれる何かに出会えるよう、これからもマナビの幅を広げていきます。



## 子どもたちの輝く未来に向けて

国連開発計画は今年4月の発表で、来年初めまでにミャンマーの全人口の48.2%が貧困状態に転落する恐れがあると指摘しました。このような状況では、助け合いの精神、寄付文化が根付いているミャンマーでも、国内からのご支援をいただくのは難しくなるだろうと、私たちは懸念していました。しかし、軍事クーデターが起きた2月から現在まで、さまざまな企業・団体・個人の方々に「困ったことがないか」とのお問い合わせや、食料・物資をはじめとするたくさんの寄付をいただいています。

Dream Trainができるご恩返しは、一人でも多くの子どもたちの輝く未来を実現することです。今年度は、5月時点で新たに10人の入所を見込んでいます。引き続き、現在施設に在在する子どもたちの保護とともに、4月から増え始めた施設入所希望者の声を可能な限り受け止め、この国の未来に貢献していきます。

## 02 カンボジア こどもたちと未来の命のために

### ジャパンハートこども医療センターは5周年に

今年で開院5周年を迎え、現在は約100名のスタッフを抱えるジャパンハートこども医療センター。現在に至るまでさまざまな困難に直面しましたが、今もなお挑戦を続けています。

病院始動時のスタッフはわずか20人ほど。活動を継続できるのか、不安ばかりの毎日でした。中でも大きな課題の一つは、コミュニケーション。英語よりもフランス語を勉強してきたカンボジア人スタッフが、スタッフ同士の意思の疎通には大変な苦勞がありました。また当初は、カンボジア人医師は日本人医師を手伝うのがやっとでした。そんな当院も、5年間で大きな発展を遂げました。開院から現在まで



に小児がん病棟や給食センターを増設し、病床が2倍以上に増えたことに加え、指示通り動くことで精いっぱいだった看護師が、今では一人で麻酔をかけるまでに成長しました。当初は一人もいなかったカンボジア人医師は、今では10人に。医療者のみならず、事務や清掃、調理スタッフなど、たくさんのカンボジア人によって病院が支えられています。彼らが共通して持つ、少しでも多くの患者さんの力になりたいという強い思いが、この病院を築き上げてきました。こうした成長は、皆さまの継続的なご支援なしで語ることはできません。今後私たちは、カンボジア人がカンボジア人を育成できる仕組みを整え、カンボジア人が中心となって運営できる病院へと、更なる発展に向け尽力致します。

### 救えなかった命、救えるようになった命



熱心に蘇生実習に取り組む助産師たち

人口に対する医師の数が少ないカンボジア。産婦人科医も、都市部の限られた病院にしかならなず常駐していません。地域のヘルスセンターには基本的に医師がおらず、助産師のみで分娩を扱います。

半年前、ジャパンハートの病院から車で30分の距離にあるヘルスセンターから、赤ちゃんの呼吸がよくないと連絡がありました。救急車で向かうと、そこには布に包まれ横たわっている赤ちゃんが。辛うじてゆっくりとした心拍が聞こえたものの、産まれてから1時間弱も経過していました。初期蘇生をしっかりしていれば助けられたのかもしれない…非常に悔しい経験でした。

その後、当院の助産師と新生児科医で、そのヘルスセンターにて新生児蘇生法の演習を行いました。数カ月後には、同地区の全10か所のヘルスセンターの助産師たちとの講習会も実現しました。参加した助産師たちは、積極的に演習用人形で練習していました。

数か月後、再度同じヘルスセンターから、赤ちゃんの呼吸状態が悪いと連絡がありました。

急いで迎えに行くと、新生児蘇生を正しく行っている助産師の姿がありました。半年前には命を救うことができませんでしたが、私たちの活動が命を救うことに一歩ずつ近づいていることを実感しました。

生後、多くの赤ちゃんは自分の力で産声を上げられますが、何人かは確実な蘇生を必要とします。今回の講習会がもたらしたのは、一地域の助産師たちのささいな変化に過ぎないかもしれませんが、それでも、蘇生技術を持つカンボジア人助産師が増えることで、少しずつ、この国が変わっていくと信じています。

## 03 小児がん患者来日治療

### 「もう助からない」を変えた皆様の力



「治療はもうできない、命は助からないと思っていました」

今回治療を受けた子どもたちが退院する時、ご両親が涙とともに口にした言葉です。

カンボジアでは救うことが難しかったふたりの小児がん患者さん(サチャくん 0歳、ソリヤカンくん1歳)。日本での手術を実現させるため、ジャパンハートは来日治療プロジェクトを立ち上げました。

いくら設備が整っているとはいえ、自分の大事な子どもが文化も言葉も違う異国の地で、重い病気の治療を受ける。家族をカンボジアに残して来日した親御さんの立場になってみると、寂しさと言葉では表せない不安でいっぱいだったはずです。

こんな状況で一生懸命に治療に励むサチャくとソリヤカンくんは、岡山医療センターのスタッフさんにも「この子どもたちの回復力はすごいね!とっても強い子どもたちだよ!」と褒められるほど。幼いながらも、ともに治療を乗り越えるふたりの逞しさをひしひしと感じる日々でした。

サチャ君とソリヤカン君の笑顔が増えていくにつれ、不安そうだった親御さんにも徐々に笑顔が増えました。ふたりにとっても親御さんにとっても初めて訪れる日本で、入院生活はストレスもあったと思いますが、最後まで本当によく頑張っていました。

そして何より、小さな2つの命を無事に救うことができたのは、ひとえに皆様のご支援のおかげです。今後もジャパンハートこども医療センターでのフォローアップ治療は続きます。ふたりのことを温かく見守っていただけると幸いです。

### できることをやるしかない 森田 皓貴医師とカンボジアでの日々

この二年間、多くの患者さんを診てきましたが、覚えているのは救う事ができなかった人たちです。僕はよく、薬がない事や自分では治療できない事を嘆いていました。しかし、当病院のスタッフは、どんな患者さんにも一生懸命ケアをします。そのため、たとえ病気が治らなくても、この病院で診てもらえて良かったと感謝してくれる患者さんばかりでした。考えてみれば、病気が治らなくて一番悲しいのは患者さんやその家族。僕が嘆いたって何も始まりません。僕はできる事をやるしかないのです。

そんな当たり前の事を、僕はスタッフから改めて学びました。「どんな患者さんにも、自分の全力を尽くし、患者さんと一緒に病に向き合う」。これからの医療活動で困った時には、ジャパンハートでの経験が僕に大切な事を思い出させてくれるはずだ。



## 04 SmileSmilePROJECT

### こんな時だからこそ、子どもと家族の時間を大切にしたい



2020年度は、20件の個別企画と3件のご招待企画を開催。小児がんと闘う子どもたち38人とそのご家族106人、計144人が参加してくれました。開催にあたっては、計58人のボランティアの皆様にご協力いただきました。

昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、さまざまな制限を受けた子どもたちが寂しい思いをしていて、スタッフも悲しい気持ちでいっぱいでした。私たちは日々、小児がんと闘う子どもたちとご家族のために何が出来るか考えていましたが、ご招待企画の延期を余儀なくされる日々が続きました。

新型コロナウイルス感染症が世界中に広がり、大切な人を亡くしたり、普段通りの生活ができず苦しんでいる人がたくさんいる中で、ご招待企画を開催すべきなのか悩むこともありました。それでも、家族で一緒に過ごすことやお出かけが出来ず、病氣と闘っている子どもたちがいるなら、やはり開催しよう、というのが私たちの出した結論でした。

そこで新日本製薬 株式会社様にご相談したところ、「感染対策を徹底して、ぜひ一緒に開催しましょう!」との温かいお返事をいただき、3月からずっと延期されていたハウステンボスご招待企画を9月に開催することができました。当日は感染症対策として、移動時の配慮やご招待企画の内容を工夫し、6組の子どもたちとご家族に楽しんでいただきました。

参加のご家族からは「久しぶりに家族全員が揃った」「治療をしている時は、こんなに楽しい時間を過ごせるなんて思いもなかった」などの声をお伺いし、改めて、開催してよかったと強く感じることができました。

小児がんと闘う子どもたちにとって、新型コロナウイルス感染症の影響を受ける日々は、家族と会う機会や外出が減り、ひととき辛いはずですが。そんな子どもたちの力になれるよう、SmileSmilePROJECTは今後も感染症対策を徹底の上、活動を続けてまいります。

## 05 ラオス

### コロナ禍の今だからこそ出来る活動を

ラオスではこの4月に、1年ぶり2度目のロックダウンが実施されました。この国では最近まで、国内の感染者数は50人程度にとどまっていた。しかし今回、新たな市中感染が発覚し、感染者数が急増してしまったのです。ロックダウン直前には、ジャパンハートの日本人職員の入国がついに叶い、いざ活動再開という所でのこの事態。悔しさが無いと言ったら嘘になります。しかし、ただ立ち止まっているわけにはいきません。この状況だからこそ出来る活動を模索し、一丸となって取り組んでいます。

例えば、ラオスではSNSなどで広がる誤った情報を信じている人もまだ多く、なかには「服に飛沫がかかっただけでも感染する」と考えている人もいました。そこで現在、SNSを通して正しい感染対策を発信。日本で培った知識や経験が、ラオスの地でも発揮されています。

直接的な医療活動の再開については足踏みが続く状況ですが、そのような状況だからこそ出来る活動に、地道に取り組んでいます。いつか活動が本格化した時に、今の時間があって良かったと思えるよう、前を向いて活動を続けていきます。

# 06 新型コロナウイルス感染症緊急支援

## 現場の新たなニーズを受け止める



2020年4月7日に国内史上初の緊急事態宣言が発令されてから一年。ジャパンハートの国内新型コロナウイルス感染症対策班は、2021年5月15日現在で13都道府県・50カ所のクラスター医療機関/施設に、のべ181人を超える医療チームを派遣してきました。北海道から沖縄まで要請があれば駆けつけ、レッドゾーンで感染制御を行うと同時に、過酷な労働状況にある現場の医療従事者をサポートするため、今も走り続けています。その途上には、1,000人以上の患者さんとの出会いと、やりきれない別れもありました。

これまでに多くの支援依頼を受けたことのある自治体に支援に入った際、クラスター対策を取り仕切る方に「ジャパンハートは“支援とは何か”を分かっている人たち」と言っていただきました。緊急救援活動は、民間NPOならではの機動性と柔軟性を活かしながらも、自分たちの『やりたい活動』ではなく、『現場のニーズに沿った活動』でなければなりません。私たちの強み、海外で十分な設備が整わない中でも医療を続けてきた経験、バイタリティやフットワークの軽さ、そして何より医療従事者たちのホスピタリティが、国内の「医療の届かないところに医療を届ける」ことを可能にしています。

変異株の感染拡大によって、第四波は私たちの想像を超える早さで訪れました。30～50代の若年層の急変も増え、医療機関に搬送できないまま亡くなってしまいうケースが後を絶ちません。現場が第三波以上に混乱を極める中、私たちにはこれまでとは異なる支援の在り方を求められていると感じます。コロナ病床拡大、軽症者隔離施設の増員、在宅療養者の往診、ワクチン接種…そのすべてから派遣の依頼を受けるなど、ジャパンハートに期待の視線があつまっています。

「自分たちにできる最大限を」。その一心で、今日も支援班は活動を続けています。

特定非営利活動法人ジャパンハート

〒111-0042

東京都台東区寿1-5-1-10 1510ビル 3F

電話：03-6240-1564（平日10:00-17:00/土日祝除く）

2021年6月1日、東京事務所が移転しました。

